

---

# 桜の雨

滝沢美月

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

桜の雨

### 【Nコード】

N1140R

### 【作者名】

滝沢美月

### 【あらすじ】

「優しい奏真に好きって言われたら、断る女の子なんていないよ」  
そう言った君だけど　もしも俺が好きなのは君だと伝えたら、本当にそう言うってくれる？君が去っていく卒業式、俺は君との出会いを思い出して、桜を睨むように見上げた

## 外待雨 h o m a c h i a m e

「奏真ネジマに思われる女の子は幸せだね」

「優しい奏真に好きって言われたら、断る女の子なんていないよ」

そう言った君だけだ。

もしも俺が好きなのは君だと伝えたら、本当にそう言ってくれる？

満開の桜を睨むように見上げて

桜なんて、大嫌いだ。

桜がなければ、俺たちは会えることすらなかったのに

こんなに切ない気持ちを抱えて、泣くことはなかったのに

あれは、高一の春、入学して間もなくのこと。

教室に居づらくて、抜け出した昼休み。裏庭にひっそりとたたずむ大木の桜の木を見つけて近寄る。大ぶりの枝に咲き誇る桜は散り始め、時折、雨のように花びらが顔にかかる。その木が気に入って根元に寝転がっていた俺の上に　突然、君が降ってきた

桜の精かと一瞬見間違えた彼女は、薄紅のスコートをはいっていた。裏庭の横でテニスをしていて桜の木にひっかかってしまったボールを取るために木の上に登っていたらしい。そして足を滑らせて、俺の上に落ちてきた。

「ありがとう」

俺の上から起き上がった彼女はそう言ってあどけない顔で笑い、テニスコートに駆けていった。

数日後、昼休みの定位置となった裏庭の桜の木の下でいつものように寝ていると、すすり泣く声が聞こえて起き上がる。辺りを見回すと、俺の寝てた木の裏側で女の子が泣いていて、体を回して見るとそれは先日の彼女だった。

俺はあまり人と深く関わりたくなかった。だから見て見ぬふりをしよう、そう思った時、顔を上げた彼女と目があって、気付いたら声をかけていた。

「大丈夫か？」

彼女は瞠目して俺を見つめ、濡れた瞳をまばたいた瞬間、一筋の涙が頬をつたう。

「あなたは、この間の……」

俺は立ち上がり、彼女に一步一步近づく。

「木の裏で昼寝してた。一人になりたいなら、俺はもう教室に戻る。そうでないなら、俺のことは気にするな」

そう言つと、彼女は俺のズボンの裾をそつと掴み、俯いた。その仕草に、動揺する俺。でも彼女が何も言わないから、彼女の隣に静かに腰を下ろす。

彼女は片手で膝を抱えて、そこに顔を埋めてまた泣き始めた。しばらくして涙が収まったのか、彼女が顔を上げて微笑んだ。

「えへへ、私、失恋しちゃった……」

そう言つた彼女の瞳が儂げで、つい見とれてしまう。俺は今までもにも恋をしたことも、失恋したこともなかったから、なんて言つてあげたらいいのか分からなくて、空を仰ぐ。

彼女はぼつぼつと小さな声で、彼女の恋を話し始めた。俺はそれをただ黙つて聞くことしかできなくて、そんな自分が少しもどかしかった。どんなにそいつのことを好きか、どんなに素敵か、振られたと言うのににこにここと瞳を輝かせて話す。

そんな彼女が理解不能だった。

関わらない方がいい　俺の頭に浮かんだのはそれだった。

だけど彼女は、次の日から毎日、この桜の木の下に来るようになった。

## 慈雨 JIU

「私は二Fの椎葉 優月です。よろしく」

満面の笑みを向ける彼女を、俺は眉間に皺を寄せて見る。

「あなたは？」

そう聞かれて渋々答える。

「一年の手越 奏真」

「えっ……一年生なの？ 同じ年かと思ってた。じゃあ奏真って呼んでいい？ 私のこと優月って呼んでね」

あまりに無邪気な笑顔をむけるから、見ていられなくて、目をそらした。

優月は昼休みを半分過ぎた頃に、必ず裏庭の桜の木にやってきた。俺は昼寝を邪魔されたくなくて、寝転がったまま、声をかけられなくても返事をしなかったが、優月は気にもせず隣に腰を下ろすと、その日や前日にあったことを話し始める。

優月の話のほとんどはテニス部のことで、テニスなんか知らない俺にはさっぱりだったけど、一つだけわかったことがある。彼女の話に出てくる“元宮”というのが、きっと彼女の好きな奴の名前。その名前は頻繁に出てきて、その名前を口にする時の彼女は、頬を

少し染めて、キラキラと輝いた瞳をしているから、失恋した相手が  
“元宮”先輩だと、俺は知ってしまった。

だけどなぜ、優月がここに毎日来るのか、俺にそんな話をするの  
かはわからなかった。俺は頷きも相槌もせずただ黙ってて、聞いて  
るかどうかも怪しいのに、それに対して優月が何か言うことはなく  
て、いつも眩しいくらいの笑顔を俺に向けてきた。

優月は、今まで俺に近づいてきた女の子達とは違ってて、どう接  
しているのか少し悩んでいた。

俺の目の色は淡いブルーグレー、髪も色素が薄く金色に近い茶色、  
肌も白く、きりっとした二重、通った鼻筋、それらすべては母親譲り。  
初対面の人には必ず「ハーフ？」と尋ねられる容姿は自分で言うの  
もアレだが、美形な方だ。母親譲りと言ったが、母は外国人ではな  
いし、俺も純粋な日本人。だから、ハーフと聞かれるのはいつもの  
ことだけど、少し鬱陶しかった。おまけに、この容姿を羨ましいと  
か言われるのも煩わしかった。

確かに、外見のおかげで女の子にはたくさん声をかけられる。で  
もそのほとんどが外見だけで

“俺”を見てくれることはなかった。中学生の頃、それでも嬉し  
かったけど、女の子にちやほやされる俺に対する男子の視線は冷た  
くなり、だんだんと外見で近寄られることが嫌になってきた。決ま  
ってハーフと尋ねられることも……

だから、高校に入学してからも、尋ねられる前に逃げた。男なの  
に逃げるなんて　そう言うかもしれないが、俺にとって、それほ  
ど大きなコンプレックスだった。

クラスに仲のいい男友達はある。だけど、教室には居辛くて、安  
息の場所を求めるようにたどり着いた桜の木の下で、君に出会った

でも優月は、初めて俺を見る人が必ず口にすることを言わず

「ありがとう」

ただそれだけを言っただけで走り去った。

もしかしたら、その瞬間に、俺は恋に落ちていたのかもしれない。  
初めて俺を外見だけで判断しなかった君

優月に他に好きな人がいてもいい、ただ昼休みのほんの短い時間を共有するだけで、対人関係に枯れてしまった俺の心は癒されたんだ。



優月と出会って、あつという間に月日は流れ、一年が経った。

相変わらず俺と優月の関係は、桜の木の下でほんの少しの時間を共有するだけ。最初は優月が一方的に話してたけど、少しずつ心を開いた俺は会話をするようになっていた。

出会った時と同じように、散り始めた桜の木の下で、隣に並んで座る俺と優月。

「ねっ、そういえば、奏真は好きな人いないの？」

そう聞かれて、ドキンッと胸が鳴る。それを悟られないように、にやっと意地悪な笑みを浮かべて。

「優月は好きな奴がいるんだよな。知ってるよ、俺」

「ええー！」

優月は驚いて揺れる瞳で、上目づかいに見上げてくる。

「どうして知ってるの……？」

どうして？ 愚問だな……そんなの、君をずっと見てたからだよ。心の中でそっと囁く。

そんな胸の内を隠してくすつと笑う。

「覚えてない？ 失恋したって俺の前で泣いてた優月。うっとりし

た顔で元宮先輩のこと話してる優月。自覚ない？」

そうだった俺に、かぁーっと頬を赤くして俯いた優月。

「そんなことあったね……。そっか、私、元宮君の話ばかりしてたんだ……」

両手で頬を挟んで、呟く。でれでれしながら、話してたこと本当に、自覚なかったんだな。あきれて出た俺のため息は無視され。

「あつ、元宮君といえばね！」

思い出したように、ぱつと顔をあげて、また元宮先輩の話をはじめる優月。

「今年のテニス部の主将は元宮君になったの！　すごいよねー」

瞳をキラキラ輝かせて言う優月を、眉根を寄せてみつめる。その視線に気づいた優月は、照れを誤魔化すように、ぼんぼんっと乱暴に俺の肩をたたきながら言う。

「やだなー、私ばっか好きな人の話して。奏真は？　奏真の恋の相談には、私が乗ってあげるからね」

無邪気な笑顔で言われて　気が付いたら、ぼつりと言っていた。

「いるよ、好きな子……」

かなり小さな声だったのに、優月が顔を輝かせて聞いてくる。

「えっ、ほんと？ だれだれ？ どんな子？」

その顔が可愛くて、頬が緩む。

「一つ年上で、だけどおつちよこちよいで、幼い笑顔が可愛くって、一途で……人の外見とかに惑わされない、本質を見ることができると聡明な子」

ぼかんと呆けた顔で見つめる優月に、俺はさらに眉間の皺を深くする。

「何だよ、その顔……」

肘で優月を突くと、はっと我に返った優月が口元に手を当ててくすくすと笑った。

「だって、奏真がそんな愛おしそうに顔するなんて……本当にその子のことが好きなんだなあ……って伝わってきてびっくりしちゃった」

ええっと、俺の好きな子は優月なんだけど、全く伝わってないみたいで、嘆息を漏らす。まあいいけど。俺の気持ちに、気づいてほしいわけじゃないから。

優月は両手を組んで空に向けてぐーっとなげき、そのまま後ろに持っていく、体ごと桜の木に寄りかかる。

「奏真に思われる女の子は幸せだね」

「えっ」

聞き返した俺の方を向いて。

「優しい奏真に好きって言われたら、断る女の子なんていないよ。だから、奏真も頑張ってるね」

そう優月は言ったのだけど……

もしも、俺が好きなのは優月だと伝えたら、本当にそう言うてる？

否……それは言っけれど、君はきつと、俺には振り向いてはくれない。君がどれだけ元宮先輩を好きか、俺はよく知ってるから

## 天泣 t e n k y u

蕾が綻び、清廉に咲き始めた裏庭の大木の桜の木にそつと触れる。高一の春、君と出会ってからもう二年が経つ。

俺だって、少しはこの恋を頑張ろうとした。それとなく、何度も俺が好きなのは君だと伝えようとした。それなのに君は、一向に気づかない。百回は……君に振られた気がする。それでも縋って、あがいて、恋を試してみようと思った。それほど、俺にとって君の存在は大きかったから

だけど君は今日、去っていく。君の大好きなあいつに思いを伝えて、両想いになって、この学園を卒業していく。

振られても思い続けた君の想いは、ちゃんと元宮先輩に届いて、もう君は片思いに胸を痛めることはなくなった。

渡り廊下の向こうに見える校庭に咲き誇る桜の木の下で、満面の笑みで写真をとる卒業生。それを祝福するように、桜の花びらが華麗に舞い散る。

だけど俺には、それが心の中で流れてる涙に見える

君の存在は大きくて　眩しすぎて、俺には手の届かない存在だった。

すつと、何かが俺の頬を伝った時。

ザザー。

さつきまで晴れていたのに雨が降り出し　俺の涙を隠す。

こんな切ない気持ちを胸に抱えて、泣いたのは初めてだった。それくらい、俺は優月が大好きで、心の支えで。

がむしゃらに頑張って恋をして、好きだと伝えるのべきだったのかもしれない。けど、好きだと伝えたら、彼女は俺を遠ざけるだろう。そんなのは耐えられない。振られるのがわかって、今の関係

を壊してまで伝える「好き」に、何の意味があるだろうか。

弱虫と言われても、臆病者と言われても、俺は笑顔で君を見送る。君が大好きなあいつと手をつないで進んでいく未来に幸せが満ち溢れていることを願って

通り雨だったのか、すぐに雲の間から太陽が顔を出し、眩しいくらい輝く。

ふっと顔を上げると、渡り廊下の向こうの校庭にいる優月と元宮先輩の姿が視線に入る。数人の友達に囲まれて、まるで二人の門出を祝福されているようで

周りの人に何か言って、優月がこっちに駆けてきた。  
俺は今、どんな表情をしているだろう。泣きそうに情けない顔をしてないだろうか

優月は俺のところに来て、なんといいのだろうか  
いや……、なんとと言われても俺は笑顔で言うとしたのだ。

笑え！

涙はいずれ、笑顔になるんだ。もうじゅうぶん泣いたのだから、笑うんだ。

笑え！

笑うことができるのは人間だけに与えられた特権なんだから、笑って……最高の笑みで、おめでとぅ、と優月に言うんだ。

天泣 t e n k y u (後書き)

これにて「桜の雨」は完結です！

ここまで読んで下さってありがとうございます。

しっとり切ない片思いを描いてみました。いかがですか？

感想や1ポイントでもいいので評価頂けると今後の励みになります。

また、誤字などありましたらお知らせください。 > m ( m <

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1140r/>

---

桜の雨

2011年8月7日20時20分発行